おいさつ

初めまして

―いくつかの驚き―

賛助会員　並河　汪
（佐伯市下堅田　泥谷）

去る十一月十八日、市主催の「史跡を歩こう会」に、妻と共に参加致しました。その節、羽柴先生の龍護寺はじめ諸所の史跡についての説明を聞いて驚きました。と申しますのは、先ず史跡についてのご造詣の深さでありますし、しかもその説明が、マイクを通じて淀みなく流れ出て、「立て板に水」とは、まさにこのことを申すべきでありましょう。

龍護寺の裏山を歩きながら、史談会に入会したいとお話しましたところ、翌日は早速「佐伯史談」一部（八月の一一号から十月の一二〇号）をご恵送いただき、有難うございました。

ところがこの「佐伯史談」を読んで二度びっくり致しました。それは十月号には、並河圭之助信吉の記事があるではありませんか。

並河信吉は、並河家の先祖でありますが、史談会に入会を申し込んだ時に頂いた同誌に、私の先祖の記事がのっているとは、何という不思議な因縁でしょうか？　並河圭之助信吉が私共に、「史談会に入会せよ」と勧奨したのかもしれませんね。

さらに、八月号二六ページ「腰越山麓からウニの化石」の項で、「山麓で見つけたウニの化石が、森下晶名古屋大学理学部教授から云々」とありますが、この森下晶教授は、先年物故された阪大名誉教授、森下薫博士のご子息であります。森下薫博士は、戦前台湾総督府中央研究所医、動物学及びマラリア研究室を主宰して居られましたが、私は同博士子飼いの家子として六年間、朝から晩までそれこそ火と燃ゆる薫陶を受け、終戦後も宝塚と佐伯と離れては居ましたが、絶えざるご指導を頂いていました。

森下晶教授は当時まだ幼小でありまして、父君薫先生が印度にご出張の際、台北から基隆（キールン）までお見送りにお連れしたことは、つい先年のことのように思われます。あれからすでに幾星霜を経まして、手を引いて歩いていた坊やは、すでに立派な大学教授に出世されました。まことに感慨無量です。

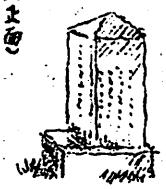
次に、この佐伯史談の印刷の鮮明さには驚きました。これは羽柴先生の並々ならぬお骨折りによる成果でありまして、原稿を切るご苦労の程は、拝察するに余りがあります。「光栄ある謄写印刷機関誌の姿を守り抜きたい」とのご熱意には感銘致しますが、余り無理は禁物。私も活版印刷にされるよう希望致します。

以上甚だ拙筆ではありますが、佐伯史談会に入会のご挨拶を兼ね一筆したためました。どうぞ宜しくお願い致します。

（以上）

〈新史料〉

薩摩兵士の墓



墓石 91cm

墓碑所在地　直川村赤木　吹原岡部家墓地（新発見）

直川村教育委員会　調査

（右側）享年　三拾六歳

（左側）諱盛屋　俗称幸左衛門
世限後氏　鹿児島県士族

（正面）明治十年
鹿児島県士族　肥後幸左衛門墓

明治十年六月十九日
大分県於赤木村戦死

是六月十九日